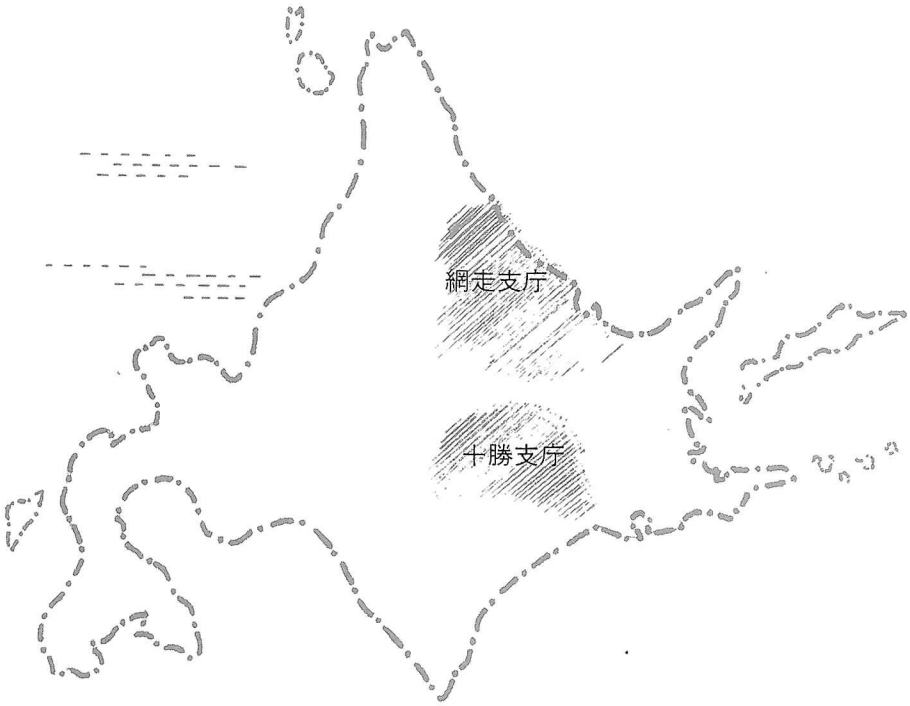
# 北海道 十勝・網走支庁

## 消えゆく熱烈な開教の歴史




**《過疎指定市町村の多い道東》過疎による檀徒の急激な減少の状況。**

道東（日蓮宗北海道東部管区）はもじどおり北海道東部で、十勝・釧路・根室・網走」の四支庁から成っている。この四支庁には、六一の市町村を数える。これらの地域の人口の推移をみると、昭和四五年以降四分の三に当たる地域に急激な人口の減少がみられ、過疎指定地域となった。

従って、北海道教区の檀家減少についての理由を見ると（図表1）、檀家の減った理由の九二％（全国平均三八％）信徒の減った理由の九〇％（全国平均四四％）が人口の過疎化を理由の第一にあげている。（昭和五五年度宗勢調査による）

**《道東開教の歴史》熱烈な伝道の足跡を見る。**

明治維新後、開拓団が入植、その中の法華信仰者たちは、宗門布教師を招いて自らの信仰を深めたり、弘めるために講や布教所を設立した。また、法華信仰のないところに、開拓地伝道を目ざした教師が、その中に飛び込み、熱心な活動を展開し改宗させたりもした。かくして信仰の拠点が少しづつ増加していった。

北海道教区のこのような開教の歴史は宗勢調査がよく物語っている。

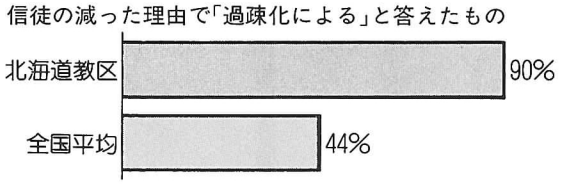
つまり、改宗による法華信仰者の増加は全国平均が三八％に対して北海道教区が六五％と高率を示している。ここに教師の苦労と努力がみられる。この伝道活動によって作られた道東の拠点を創立年代別にみると、

○明治年間　一八ヵ寺
○大正年間　一二ヵ寺
○昭和年間　六ヵ寺
○不明　六ヵ寺

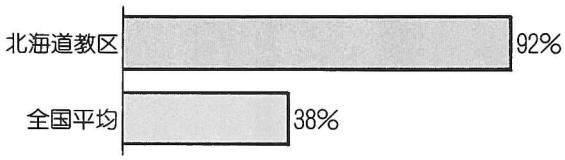
合計四二ヵ寺となっている。

この創立年代はいずれも開拓が漁業から

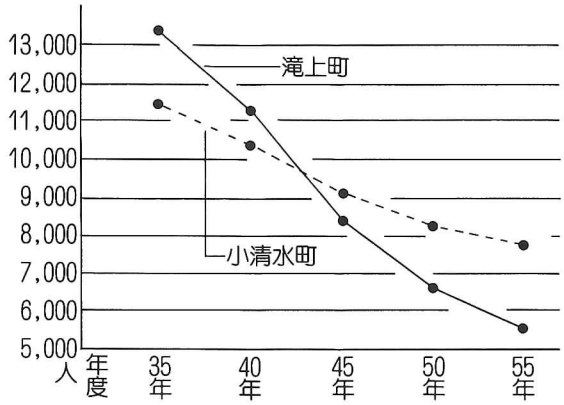
図表1
信徒の減った理由で「過疎化による」と答えたもの




檀家の減った理由で「過疎化による」と答えたもの。




図表2　人口の変化の例

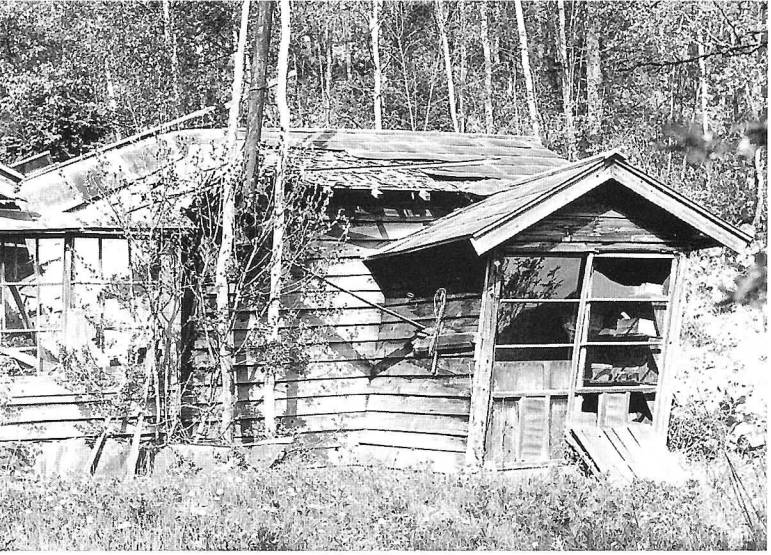


農業、海岸から内陸へと進行していった軌跡に符号する。開拓に従事した人々と苦楽を共にし、その中で、布教、伝道がなされていったことがわかる。

**《道東過疎地寺院の現状》事例を中心として過疎地寺院をさぐる。**

先に述べたように、急激な人口減少により、道東の四分の三に当たる市町村が過疎指定地域になっている。

したがって、かって未開教地に設立した布教の拠点、道東の四二ヵ寺のうち住職不在七ヵ寺、後継者なし一二ヵ寺と約半数の寺院に住職不在又は後継者がいないという現状である。これらはいずれも都市部でなく郡部であり、しかも過疎地域の寺院である。それでは、これらの地域での本宗寺院は、現在どのような状況に置かれているかを次の事例により報告したい。



開拓開教の拠点

（A寺）ある未開教地に布教した教師の場合。

現住職である創立者は、立正大学を卒業すると、開教を志し、宗門未開教地、清水町で布教を始めた。「**太鼓一丁で寺を建てた**」と言うように朝五時に起床、改良服に頭陀袋、八時から夕方六・七時まで、各家に宗旨を問わず、玄関先で唱題・回向をくり返した。他宗の僧の嫌がらせ、怒りの中「忍辱のよろい」を着て続けた。くる日もくる日も続けた。その結果人々はよろず相談に訪れ、次に法華経に耳をかたむけ、やがて入信するようになった。そして檀家を百戸にするまでに成った。

しかし、過疎化が進むにつれ、檀家は六〇戸に減少した。開山である現住職は病気と老齢化のため、生活保護を受け、特別養護老人ホームに臥床している。法務は奥さんが勤めているが、子息は、僧籍はなく既に東京に就職している。開教の使命に燃え、未開教の地に題目の法灯をともしたが、今その火は消えようとしている。

（B寺）篤信者が布教所を設置した場合。（紋別郡生田原町）

大正八年、三人の篤信者によって設立、教師を招き、法華信仰を弘めた。昭和三七年住職が遷化するまで七人の教師が任に当っている。昭和二一年の寺号公称当時は三四戸の信徒があった。しかし、昭和三七年住職の遷化により常住者なく、御堂入口はくぎ付けにされ、長い間、人の入った形跡はない。周辺には雑草がおい繁り、寺院としての機能を果せないでいる。

（C寺）産業構造の変化による、人口流失の場合。

紋別郡滝の上町のC寺は大正六年篤信者の寄進で堂宇建立、招かれて日蓮宗教師が担任、昭和三〇年頃は農業・製材業共に栄え、二三もの製材所を数え、人口一万四、七〇〇人あった（図表2）。

それが、現在人口は当時の三分の一の五、三〇〇人に、農家は一〇〇〇戸が四分の一の二五〇戸、三〇〇〇町歩の畑は三分の一になった。製材業も三分の一の七軒に減少した。林業は輸入材主流となり、また農業は少数による大規模酪農へと、産業構造が変化していった。若者は職を求めて、東京・札幌へ流出した。一〇〇戸あった檀家も五〇戸に減少した。四〇年間にわたって住職を務めた老僧も、高齢と病気のため、札幌の子息の俗宅に引き取られ寺を出た。残された檀徒は、住職として来てくれる僧侶を待ちつつ、寺院護持に務めている。

（D寺）開拓移住した法華経信仰者が設立の場合。

斜里郡小清水町D寺、この寺は開拓移住した法華信者の発願により大正一〇年開設された。

以来昭和四五年本堂・庫裡を新築、五四年には納骨堂も完成した。この事業を成し遂げた先代住職は、急に遷化された。現在未成年の長女と長男、それに未亡人の三人で法務や護持に務めている。長男は学校から帰ると月回向まわり、未亡人は檀徒の応対、長女は車を運転して母と弟を助けた。父、住職一人の力で教化し、寺観を整えたその努力を、そのまま継続することは困難であった。ついに母は病に倒れた。母の唯一の願いである「**長男の出家**」そして身延山での修行も、母の病気のため断念しなければならない。

住職が人生半ばで遷化した結果、残された寺族は、この先どのようになるのであろうか。

**《努力と工夫の布教》過疎地の中でがんばっている結社。**

このような厳しい状況にあっても、教師の努力と熱意により教化の実をあげているところもある。それは数少ないものではあるが、注目に価するので、ここに紹介する。それは、帯広市にあるE結社である。

この結社は昭和三九年に創立されたが、創立者の教師はすでに遷化されている。現在、その夫人が活発な布教活動を行い、毎月の講には三〇人位、お会式には一〇〇人位の参拝者があるという。その布教方法とは、温灸治療を施して身体の健康回復を促し、一方、信仰により心の健康を求めるといったものである。このような独特な方法により法華信仰の維持発展に務めているところもある。

**《まとめ》**

全体的に見ると事例の如く人口流出と共に布施収入の減少、次いで経済的困窮、そしてある者は病に倒れまたある者は過労・老化により遷化されていく。かくして残された寺族は、生活苦の中にあって、法灯継承には困難を極めている。他方、檀信徒はこのような状況にあって、たとえ兼職をしながらでも、在住してくれる教師を求めているのも現実にある。

このように道東の現状を見ると、過疎で苦しんでいる教師、あるいは残された寺族に対して、異体同心を唱え、伝道教団と叫ぶ宗門は、どのような対策を立てたらよいのだろうか。